

地域の先生との米作り体験活動 千葉県我孫子市立我孫子第二小学校

学校の概要

学校規模

学級数：12学級

児童数：383人

教職員数：30人

体験活動の観点から見た学校環境

学校周辺には、地域の農家の人達が耕す田畑が広がり季節折々の作物の成長を目にすることができる。

道路の開発等の進む中、まだ自然が多く残り水田の近くの水路では、どじょう、ザリガニなどの生き物を捕まえることもできる。

本校では、およそ10年前から「体験活動を通して自ら学びぬく子どもを育てよう」というねらいのもとで、研究を続けてきている。地域の方々の協力によってこの体験活動が支えられている。

学区は利根川と手賀沼にはさまれた高台に位置する。学区内の天王台駅周辺は、商業地と住宅地、東我孫子駅周辺は住宅地が多く、学校付近には農地も点在している。

連絡先

〒270-1138

千葉県我孫子市下ケ戸610

電話：04-7184-1722

FAX：04-7184-1797

ホームページ

<http://members.jcom.home.ne.jp/abiko2/index.htm>

1

電子メール：abiko2@jcom.home.ne.jp

体験活動の概要

活動のねらい

「米作りの体験を通して食と農に関心をもつ」

私たちの食生活を支える日本の農業について、その生産の様子を地域の農家の方々（地域の先生）による具体的事例を通して調べたり、体験活動から実感させたりしながら、農家が生産を高める工夫や努力をしていることに気付かせる。

我が国の食料生産の現状や問題点に気付かせ、その解決方法やよりよい米作りの方向について地域の人々から学び、自分達の考えでできる範囲で実践させる。
主たる活動内容・方法(位置付け・期間等)

総合的な学習の時間

主たる活動地は、学校田(6アール)

期間は、もみまきから次への引き継ぎまで

農業体験活動としての田おこし、代かき、田植え、除草、稲刈り、脱穀等
(総合的な学習の時間51時間)

食料生産の教科学習(社会科12時間)

食体験としてぬか漬け(家庭科2時間)

体制等の工夫

地域の先生やPTAの方の援助と協力

担任外の職員の援助

活動の成果等

興味・関心を持って問題解決する意欲が生まれ、主体的に活動できた。

自らの体験を通して農業生産の工夫や努力を実感することができた。

1 活動に関する学校の全体計画

(1) 活動のねらい

私たちの主食である米が、どのようにして出来るのかを体験を通して学ぶ。稲の生長の様子、米作りの方法や仕事の内容、工夫や苦勞を体験を通して学ばせる。

安全で美味しい米作りをするために土作りや農薬のことも触れ、雑草とのたたかい、「メダカの学校」による自然耕栽培など米作りが自然環境と関わっていることを学ぶ。

収穫の喜びを米作りに携わった方々と共に味わい、感謝する心を育てると共に食文化への関心を持つ。



二小の田んぼで田植えが始まる

(2) 全体の指導計画

ア 活動の名称

「二小の田んぼの米作り」

イ 実施学年

第5学年

ウ 活動内容

・ 勤労生産に関わる体験活動

もみまき、田おこし、代かき、田植え、ぬかまき除草、稲刈り、脱穀、もみすり、精米、昔の道具（足踏み脱穀機・千歯こき・石うす）での体験、ぬか漬け等

・ 地域の方と交流する活動

二小祭りでの石臼での粉ひきやわら細工・収穫祭等

エ 教育課程上の位置付け

(ア) 教育課程内の体験活動として位置付けている。

(イ) 主に総合的な学習の時間、一部に教科や学級活動の時間をあてている。

オ 実施時期（期間や時間数）

期間は、4月のもみまきから2月の次の学年への引き継ぎまでの65時間となる。

カ 活動場所

主たる活動場所は、学区内にある学校の田んぼで、広さは約6アールある。

キ 継続の状況等

社会科で「食料生産」について学習した後、子どもたちは「テーマ」を決定し地域の先生との体験を通して解決の方向を見出そうとしてきた。学習の記録をもとに、課題解決できたことをまとめ、新聞の発行やビデオ上映を行い、児童や保護者への発表も行った。また、収穫したもち米で餅をついて全校児童に手紙を添えて配る等、収穫の喜びも味わった。新たな環境問題への課題解決の方策を練り直して次年度へと発展させたいと思う。

2 活動の実際

(1) 事前指導

《第一の体験活動》 もみまきから収穫まで

もみまき・苗づくり

子どもたちの中から、「米作り実行委員」を決め、自分たちの力で進めていける体制作りをした。子どもたちは、それぞれに「米作りのテーマ」を決め、自分が学びたいことを「米作りのファイル」に記録していくことにした。4月18日、種もみを苗床にまいた。この日は、ずっと米作りを教えてくださる地域の先生（Kさん・専業農家）との最初の出会いの日でもある。K先生が選別して下さったもち米の種もみを育苗ケースにまいた。前年までの地域の先生も駆けつけてくださり、愛情をこめて育てることの大切さを教えていただいた。



昔の道具で体験学習

田おこし・代かき

4月24日、田んぼの土の掘り起こし、あぜ道の修理、くろつけなどを行った。子どもたちは、鍬、シャベルと昔の道具（牛に引かせた鋤）等を使って田おこしを行った。土が固くて大変だったが、初めて田に入り、気持ちと身体が一つになって働く大切な作業であることを教わった。

5月14日、昔の道具を使って代かきをした。泥に足を取られながらも、渾身の力をふりしぼって田植えがしやすいように土をならした。服は、泥んこ遊びのように真っ黒になった。

田植え

5月17日には、田植えをした。Kさんから、苗の取り方や植え付けるときの持ち方、指の使い方を説明してもらった。体験を通して学ぶことの大切さを改めて実感した。実験田も開始した。一株の苗の本数を変えて植え、育ち方を比較することにした。古代米・赤米やミックスした米の栽培にも挑戦していった。子どもたちは、交代で田んぼに行き観察日誌に記録した。



米ぬかをまいて雑草対策

ぬかまき除草・草取り

稲作では、収穫までの間に水の管理と除草の仕事がある。ぬかには、乳酸菌という菌で草の発芽をおさえてしまう働きがあるということを知った子どもたちは、環境問題や安心して食べられる米作りを考えて、米ぬかをまくことにした。天気の良い日に3回まいた。ぬかが風でとんで目に入ったり、服にかかったりしたが、自分たちの課題への挑戦なので満足できた様子だった。

子どもたちは、自分たちの手で育て、生長していく稲の観察を楽しみにしていた。夏休みに、稲の花を見て感激したという感想が多かった。

稲刈り・おだげ

秋晴れの9月25日、いよいよ稲刈りである。鎌で刈り取る時の、「ザク！」という音が気持ち良く響いた。おだげがしやすいように二株、二株、計四株



刈った稲をおだげする

を八の字になるようにして麻縄でしばり，それを十束ごとに畳の縁でしばってトラックに運んだ。稲刈り機を使っての刈り取りも実演してもらった。途中，4年生が，来年に向けて見学に来た。6年生も，ホームページづくりの取材としてやってきた。最後には，2年生が落ち穂拾いの応援にきた。



千歯こきでの脱穀作業

刈り取った稲は，トラックで校庭に運び，おだかけの作業に移った。三段にかけてもかけきれず，鉄棒や手すりにもかけることにした。実験田で栽培してきた米についても後日収穫して結果をまとめた。来年用の一部は，種もみとして残すことにした。

脱穀・もみすり

9月29日，脱穀をした。脱穀は，昔の道具（千歯こき，足踏み脱穀機）を使った手作業と，コンバインやハーベスターなどによる機械作業を体験した。子どもたちは，昔の道具の方が気に入っていた。10月6日，地域の農家をお願いして機械でもみすりを行うところを見学した。もみすりの機械から，もみがらが勢いよく出て，袋にすぐに米がたまっていく様子に子どもたちは驚きの声をあげていた。収穫量は，4俵と30kgであった。

(2) 活動の展開

ア 活動内容

時配	学習内容及び活動	指導・支援	備考
5	1. 本時の活動内容を確認する。 もち米をどのように食べたいか調べてきたことを発表する。 ・粉にしてだんご ・水あめ ・餅にして雑煮 ・かきもち	・玄米を提示し，意欲付けをする。 ・もち米の，おいしい食べ方を家族に聞いたり，インターネットや本で調べたりしてきたことを発表する。	玄米の袋
	玄米のままでおいしく食べられるだろうか。		
10	・精米したほうがいい ・玄米のままの方が栄養がある	・精米の意味を知り，おいしく食べるためにそれが必要なのかどうか考えさせていく。	栄養士の先生
10	2. 栄養士の先生に聞いてみよう。 ・玄米の良さ，白米の良さ		精米する道具
15	3. 精米してみる。 ・白米とぬかになること ・米ぬかについて考える	・ぬかまき除草した時のことを思い出させ，他にも利用価値の高いことや栄養価について知らせる。	精米機
5	4. 色々な方法で食べ比べてみよう。 グループ作りをする ・白米でもち ・白米でだんご ・白米でご飯 ・玄米でもち等	・希望ごとにグループをつくり，仕事の手順を確認させる。	
35	5. 家庭科室に移動して準備する。 6. 自分の課題毎に活動を開始する。	・見通しがついたグループごとに移動させる。手順に迷いがあるグループには，相談にのる。	家庭科室調理する道具
10	7. 活動を紹介し合う。味わってみる。 8. 活動を振り返り感想を発表する。	・各グループの活動で，満足できたかどうか自己評価させる。	餅つき機 活動の記録

イ 活動の場や施設

約6アールの田んぼ，5年生の教室，家庭科室，体育館等

ウ 指導者・協力者

担任，担任外の職員と地域の先生が中心になり，PTA幹事や学年委員の方々の協力を得て活動ができた。

エ 児童の活動の状況

本時では，長期にわたる農業体験の中から，収穫後の米の調理方法に焦点を当て活動，実践することにした。玄米，白米を調理して試食したことで実践後は，米への関心も高まり，食の歴史や米のもつ力を見直し，次時の課題へと発展させる児童も出てきた。



収穫祭での餅つき

(3) 事後指導

《第二の体験活動》 収穫後のわら細工とぬか漬け

子どもたちは，収穫後のわらを利用した遊びを二小祭りで行いたいと言ってきた。わらで縄や人形を作り，その縄で綱引き・輪投げ・縄跳び・コマ廻し等の遊びを工夫して，二小祭りの出店は大盛況となった。

子どもたちは，乳酸菌の作用による米ぬか除草に取り組み，成果を得てきた。精米後のぬかの利用法も考え，ぬか漬けを作ろうということになった。ぬか漬けの名人である技能員さんに教えて頂き，ぬかをフライパンでいり，塩と水を混ぜて大樽で数日ねかせ，旬の野菜を漬けて昔ながらの健康食の出来上がりである。手作りの味は格別で，野菜嫌いの子も進んで食べるようになった。今も5年の廊下にはぬか漬けの樽が並び，各家庭から野菜の協力を得て，おいしいぬか漬けづくりを続けている。



ぬか床づくり

3 体験活動のための体制

(1) 学校の体制

担任と地域の先生（地域の農家の方）が中心になり，PTAの幹事や学年委員の方々，担任外の職員が援助している。また，田植えと稲刈りでは，保護者も一緒に参加して行っている。

(2) 活動の場や指導者の確保等の手立てや工夫

本校では，地域の農家の方から水田を借り受け，農業体験活動への協力をいただいている。学校全体で，感謝の心を伝えられるように，子どもたちの学習の成果の発表会等に招待したり，感謝の気持ちを手紙に書いたり，収穫した米を食べていただいたりして，児童の変容を地域の方々も共に見守っていただける連携作りを学校全体で心がけ，推進している。

4 成果と課題

(1) 成果

- ・ 子どもたちは，地域の方々との体験活動を通して，農業に従事している人々が一つ一つの作業に愛情と工夫を重ねて，生産を高める工夫や努力を続けてきていることを実感できた。
- ・ 稲は捨てるどころがなく，日本人の知恵と文化の一端をこの農業体験学習から学ぶことができた。

- ・ 個人テーマを持って体験活動に取り組んできたので、問題解決への意欲も高まり主体的に活動できた。新たな課題へと発展する児童も出てきた。
- ・ 地域の方々との長期にわたる体験を通して、交流を深めることができ地域の中で育つ喜びも自然と実感できた。
- ・ 個人のファイルを活用したことで、学習の足跡を振り返り次の意欲へとつながってきた。

(2) 課題

- ・ 農業体験に費やす時間が、かなり多いために他教科との関連を考えた年間計画も工夫していききたい。
- ・ 学校行事と収穫祭等が重なる時期がある。子どもたちに時間的な余裕を持たせるため、行事との調整を検討していききたい。
- ・ 課題解決学習を、より効果的に進めるために個別指導のための時間を確保していききたい。

5 今後の取組の方向

子どもたちの興味・関心は、農業生産を高める工夫の体験と共に、自然と共存できる農業生産の工夫へと向かっている。今後は、自然に優しい農業生産の工夫やメダカの住める水田作り等も試みていききたいと思う。

【本事例活用に当たっての留意点】

児童が体験活動を通して学習する際の面白さの一つは、自分の体験そのものが学習活動の中心にあることである。本事例においては、それぞれの児童が自分の「米作りのテーマ」を掲げて取り組むことによって、この体験活動が自分を主体とする学習になり児童は意欲的に活動することができた。また、自分が学習したことを「米作りのファイル」に記録し、まとめることによって、学習成果を確実に自分自身のものにすることができた。

このような取組を確実に行うためには、教科の学習において自律的な学習姿勢を育てること、学習指導の要点を明確にすること、児童に観察の要点などを明確に伝えること、児童を個別に指導する時間を確保することなどが大切である。

専業農家の方、学校栄養職員や技能員など多様な人の協力を得たり、地域の方の前で学習成果を発表したりすることによって、児童の体験活動が一層豊かなものになっている。